



對梅宇日涉

第六編

對梅宇日涉



芭六焦心盡展新枝新卷新
 心暗尺隨顛學新心養新
 德長隨新業起新和

張子序流芭集詩 秋後出逸書齋

對梅宇日涉第六編附言

清人顧炎武セイヒトコ曰子書皆自成一家言セイヒトコ。至呂氏春秋淮南子刻不能
 自成故取諸子之言彙而為書セイヒトコ。實カ後世之著書大々々々皆質の流セイヒトコ
 成ナ其ナ流セイヒトコ。況ナて諸物の撰集セイヒトコ。他の花を摘ツと実を採ヒひて自の香ナと成ナ
 一ニ似ニてレを難くもあレる業ナたるを動すモハ乖并ナあるハ早竟ニ意ヲ用ルるナ
 ころ。又を修格ガもレぬ。至モ字の故モかりクとシ。と離るヲ族ヲありクとシ。
 元ハ被レ三字シ。魚魯帝師シの古語ヲをもシ。ぬ鳥コ解レ人ト。至モ情不通ノの小史セ
 かりク。抑撰集ノの容易クとシ。る勅撰ノの廿一代集ノ。れ撰者ノ秀才ト撰ス
 てる。吾派ノを突門ノの冬ノ日ノ編ノ。全備ノ志ヲ。首尾照應ノ。及對緩急ノ。す
 べて文意ノの法格ノ。おシ。今ノとシ。集ノありク。おシ。かク。凡ノゆるル。文字ノのカとシ。

カウサウシ 葛子史の事、出、を、編、若、八、大、人、集、方、さ、の、左、も、右、も、集、作
 入、その、功、績、多、く、立、て、版、今、茲、の、夏、以、来、出、め、
 集、八、二、一、是、茶、橋、斎、水、橋、敬、海、板、新、を、大、衆、花、性、書、集、良、大、
 袋、花、見、概、弓、集、其、六、編、高、菴、葛、飾、早、稻、松、桓、芳、泉、
 ▲か、ろ、も、り、聖、水、義、琴、▲草、子、為、山、▲本、の、象、串、奇、泉、
 ▲通、計、十、有、一、種、風、系、
 塵、埃、の、勞、を、終、了、若、海、花、実、を、お、な、り、都、英、か、る、れ、這、人、を、是、
 世、情、の、通、学、者、若、こ、と、を、り、終、了、余、亦、存、集、を、終、了、て、件、の、学、者、同、列、
 加、ら、す、欲、す、也、却、て、嗚、呼、の、不、笑、を、や、り、ま、す、可、い、

庚午霜月旬日

水風堂主人乙亥後



對梅宇日涉第六集

東京 蒼僊舎東南板合

松筠堂中から對梅宇日

あそびて即事

ずしきや池より四ツ魚のうら
 月紅ひうりをあつゝあ竹
 用子たのめなけ色けりま
 りも所々さきあけさるの骨
 老木たけけささうま梅
 次の名れ二階のまじり置
 結晶帯 けく 過 占 の 意

狗 荒 高

乙 荒 高

半 醒 高

高

醒 高

高

高

高

かんへのの苗おまらぬの打取
手織本めんを小くくす
これ竹お等々一縣の色きり
型くくくくおまらぬらうら

高

醒 亮 醒

不通夜忌

まらぬのまらぬ常々
雪きりくくくみくく夜の月
汐のむく舟を今月まきく
泣きあひふくくかき一蝶
研ま舟師乞の市を思てせり
鳴りくく鳴りくく鈴の緒

字 湖 亞

尺 水 物 水 物

ふくれ其袖まらぬの音
別るへかきく産おまらぬ

右八章

けさおおの波きく産陣子
産おおの砂らくなく
きぬらつきまおまらぬ
方まらぬせまきか合せり
做面彫の名まらぬ産お
時おまらぬ子おらわら
わ
たう産おらわらわら産甲子
産湯もかきく産の産お

乙 月

尺 水 亮 亮 亮 亮 亮 亮

おしとけい舞子けうを連ぬそ
かきうつううそーし 唐除
夏もさ友増おあうる 庭柳
とんとく多お 落る 梅の口
梅り新浮お秋の古柳は
すもめを唱へ 雷の痛む身
梅もれゝ露の落窪縁通一
梅前のお終おひとうてう 鳴る
風吹も梅も板をを 吟え
簾あゝ居る 春の炭やき
沸くお中を 巻られぬ 聖蒜鹽
泥才とくとも 親乳のく

表、 染 表 染 表 染 染 表 染 染 表

先格をいそ 娘入の面倒を
盆巻をいそ 十纏のうれあき
さー 夢を 昇り けうのうきつそ
吾呂利う 袴くら 何ををさる
深やら 何や 知さぬ 枝素木
時維お 彩ふ 冬お 海より
の口へ 出せさ 波を 水お 乳
酒を 一生 色さ 小巻 清
更科といふとも 柳の 秋の 月
ひを 露を 露の 玉く くれ
手くくく 砦にかゝる 布巻を
江潮うららの 母を 御来る

表 染 表 染 表 染 染 表 染 染 表

十端行

唯所よりまもみとらむ枇杷の花
物田結々すくすくしとりの船風
ついでに結の帯りも振られや
夢の掛をぬ舟は漕く
ふとまたたき尾の文を採返し
舟は雲舟をききとん十七
中あつとりの結を染る川をこせ
意をゆれそゆのひや
とりて結お直みりりき結を
結をむむとを夢りた

乙 茶 皿
亮 魁 物 亮 魁 物 亮 魁 物

夏之部

夕影や扇をこもる水の音 上戸
清りの香名刺を五月る、
草花香よいとくありし夏の夜、
ゆつとや香もゆらんよ小舟の、
葉と花の香よとくさるれ、
壁をまよとれぬ家の新茶が、
中一暇や香田を結る日如風 甲野
湖を見ても眼がきき悪れ、
名も人知本流をくし物の毎、
夜半まで更し扇をひきの客、
名も人知本流をくし物の毎、

琴 和 昌 新 昇 太 沙 炭 琴 亮 九 江 晴 嶽 不 幸 蕉 軒 李 莊

五
六

松蔭舎

新さや祝もくもくもくむ清水、
第やみくもく新まきひりの肥前 蓮宇
麦

秋之部

とつる中大群よりゆふ七羽 伊勢 洵菟島
味多けさ味の竹より秋の風 半陸 松倉

木登町一泊

さうれより蒙層露々川手水 西京 良大
起これえけさの秋より常の輝み、 九岳
船蛇の夢跡はとたりふも晴、 漁藻
窓高くと見え八人あり窓の秋 木つ 松宿
風くもくもく未登を——秋の輝 空

志不深き清くなられや昔の志

硯川まで

川の名の流さるるあり一硯りれ 甲斐 怪池
あつとちり知るるあり露跡玉、 森 居

と平を唐糸のまきよつれを巻能
の端とまきよつれを巻能
むさうのほろりまきよつれを巻能
とまきよつれを巻能

とつる粒や夕虹をまきよつれを巻能
唐糸よまきよつれを巻能
一日清空一と福
とつる粒や夕虹をまきよつれを巻能、
半 湖
素 古
乙 齋

色は清くて紅の中を世に通りぬ、
 蒼きより一掃こころぬきけと慕われ、
 灰にたゞる長しき世にさとりうき、
 つまのまのがくぬれぬいゝるが、
 今を報ひてくちをむねに生か、
 先二百十日もとれて松の月、
 潮のりを引く聲もむねに流る、
 うらむ人を叫ぶもその月見が、
 今終る本殿よりぬく一葉れ、
 中よ愁のわかれ嘆えと月夜草、
 掃あさるやその庭より猿桐の花、
 つまのまのや珍居る白きと女子は、

通 石 喜 左 是 全 冷 竹 江 北
 古 外 我 了 如 如 春 左

潮は清くて紅の中を世に通りぬ、
 蒼きより一掃こころぬきけと慕われ、
 灰にたゞる長しき世にさとりうき、
 つまのまのがくぬれぬいゝるが、
 今を報ひてくちをむねに生か、
 先二百十日もとれて松の月、
 潮のりを引く聲もむねに流る、
 うらむ人を叫ぶもその月見が、
 今終る本殿よりぬく一葉れ、
 中よ愁のわかれ嘆えと月夜草、
 掃あさるやその庭より猿桐の花、
 つまのまのや珍居る白きと女子は、

玉 連 翠 林 露 空 相 海 士
 光 水 岳 嶺 山 彦 海 前

清書

六ノ十

初秋や人乃菊酒の香の物、
 おあしきよきもほろほろお探れ、
 秋風はけりさきむらさき、
 露露とわひしきや芽衣のき、
 あまのりかかて城の世帯に、
 都はたまに板をぬけ海に、
 湖は流し里や月をさす月、
 あうりあはれさくたはる秋の風、
 務はをやゆらけはる流るる、
 若月やねねる下瀬のき、
 香作

初 秋 物
 菊 酒 探 れ
 秋 風 け り
 露 露 と わ ひ し き
 芽 衣 の き
 城 の 世 帯
 海 に
 湖 は 流 し
 月 を さ す
 月
 秋 の 風
 流 る る
 若 月 や
 ね ね る
 下 瀬 の き
 香 作

まるきやまのたふあまとも
 小東の系を立出て白川の香風は秋
 の寂を母のいねの海さきを
 そききて海くこの名のははたき
 通意のををひくたむやけの
 小東の系は月をのたきとま
 秋をさきとあう君祖のをさき
 まるきやまのたふあまとも
 江のつらひ人あ地をさき電の煙さき
 けりさきとあうりかかて城の世帯に
 いそはは絶の海を流るるあまとも

香作
 青 眞

陽炎なるものごとく

人あしぬるをうらめて暮れを 暮代 喜高
梅の花をむかへてなごめたり、 剛 如
夜梅や思ひ切るる半つとひ、 杜 山

はるさるの秋の風をうらめて梅の花をよめる
半つとひ梅梅の秋の風をうらめて

なごめたるは只葉をうらめて梅の花をよめる
ふたつとひの秋の風をうらめて

明月やうこれのうらむる水の下 旭 高
うらむる水の下をうらめて梅の花をよめる 梅 居
かき合す秋の風をうらめて梅の花をよめる 左
露をうらめて梅の花をよめる 約 月

紅葉のうらむる人や梅のうらむる花を 良 梅
梅をうらむる人や梅のうらむる花を 梅 后
ちこけのうらむる人や梅のうらむる花を、 十 湖

梅のうらむる人

うらむる梅のうらむる人 菊の花を 峩 琴
十の梅や川越す人の小梅のうらむる花を サツマ 州 風

出来たらうらむる人 梅のうらむる花を 梅 高

梅のうらむる人 梅のうらむる花を 全 高
源のうらむる人 梅のうらむる花を 梅 高
蓋捲て、首途よりうらむる梅の花を 西京 粹 白
たらのうらむる人 梅のうらむる花を 然 池

其色をゆきりし出するるし
 大坂 師 弥
 其の由りさるぬらうやねのふ
 宗 暁
 初ねきる色も雲に切てちる
 君 海
 うらゝ病つらぬくも月夜に
 上 け
 風を才をかきとるや秋の露
 のきさ

今戸大七様にて

名月中あり秋夜すく河日川
 下 千 種 好
 秋風やわらも袖のちるれ空
 乙 思 水
 川ねとの耳に付たり秋の音
 乙 友 佐
 川 雪や月をけくも
 左 桑 古
 晴るりむらうをくは過ぎ
 上 け 桑 古
 雲の羽海は又見え初あし
 桑 雄

利根川もあられをて赤鯉鮒
 乙 朗
 次とと秋ふむ多や夏の川
 カ 雷 帝
 あき立やけり嬉しき巻の意
 下 け 薙 外
 川のちと病れもやなりさる
 如 川
 挽ふも舟と見ゆや月の海
 茂 精

善光寺

待宵にまつよふ是るるなり
 正 了
 なしよのなるて淋しやき終花
 百 鴉
 月夜やまらやけり孫のら
 信 可 孫
 戸田川洪水
 庭にあり松葉及る戸田海
 庭 兩
 夢り賣牙は正叫志るるなり
 葛 古

うけ編わ田中の森は雪質は神、
 魚川はうと秋をかりけり雪の色、
 沙呂敷やそより北下の秋の露、
 月交てさかし苗より破布子、
 桐一葉落して行や夕々しくか
 とらふも雪もほとあはれなり、
 月ありと見えはるるつくと白くれ、
 何の物と推しぬや秋のこれ、
 積りやとりて一てりとの羊

雪磨
 採花女
 遊堂
 龍湖
 一理在
 俄友
 葛之
 里崔
 皆如
 五

夏十月十日の夕利松川を舟より
 下りてその衣は成利はよなん栗橋の

河岸へ是て垂谷のくると舟り

啜飯の形

め、楚の船は宮へ舟を引、
 川よりや舟は舟かき、風は秋、言
 之り月や少きを舟り、入交、言
 有盛
 明月やうすを鳥さ記を驚
 笠原や舟は舟かき、舟の言、
 志、垣をるる、崩進て居は月、

栗月
 友并
 潮風
 全
 豊友
 畏三
 遠家
 淇竹

日吉

有盛

あゝ作人なつりやうの月、
川舟や月よ自由の棹つこひ、
志不為秋吹世そあや秋の風、
鈴りやおひし出る啼やうよ、
燈をきく燈る秋うわしむ、

安倍仲磨

月のうちちとけまれをふ並ぬ、

この秋もよき暴風吹倒さし

あゝもがきううね

風鈴や力なうきく所ころ

夕雲秋を空に満てたりを、

羽衣の松

翠陽

百嶽

笑友

秋甫

翠文

半桂

全

李川

月桂をく袖の砂路の流をり、
露不しの水と物うや学は上
生討の蝶秋と物へお羽たくれ、

横濱吉麦字中

蓮宇

尤縁

二松

初秋の夜白を飾る人通り
雪を帯和を海きまて白を更む、
心志めて月よ對や等け白、
風を秋を吹るあうたて昔のそま

閑生

藍泉

為梁

斗大

雪朗

ひと等力借ころ廣秋の勢
つらう白降中て

蒼外

名月やそくく白は笑一美

全

おと結庵のうらみをうて
教うけしすき机や萩の月

乙 亮

九月念二

聖上御誕辰御祝酒を

御歳しちりて

九月よりゆきこころの菊の花 若港

若 臣

○ 御歳あまらぬ

十一しき舟の舟の浪の響き 早口

文 貞

神人の徳をうたは

ゆきそて其を佳しきや葛蒲賣いッ

玉 光

うき人うきの心きて切牡丹の 岩代

西 英

神の心 神をうてくを神かイセ 市 乐

孝の心を愛しき一は

江戸の舟一町をなく西の白き

見 高

をを舟のかゝる舟をうきをを

舟 水

ゆき舟の心とめて夜の月

景 木

雲ゆりてゆきふききうむ西堂

泉 梅

板橋の舟の時鐘のひききり

岸 子

みしを舟のひききりてあつたの豆

笑 友

葉ゆりてゆきをけりて舟が

御 風

神の心を

左

舟人ちりて舟をうてくを舟か

左

破ゆやまのひすら道と、うり花
 ちんりつてきも草のたふを
 春うけこりかいつきやうり花
 杖白しよ、せし甲斐やゆり花
 縹木うりりて種あしうり花
 老幹と見えぬまうりやゆり花
 それとけりて足存りうり花
 根を紐の山をりすまうり花
 不足るに腐の位序やうり花
 うりて正月のひらうり花
 枯枝のやう見えたりゆり花
 りりりるを極まうり花

昭 頂
 素 外
 うめ
 再 兄
 何 月
 護 外
 進 外
 吸 露
 榮 昌
 其 英
 謝 葉
 月 朵

口切を聖りしつそくやゆり花
 小き姑存りし合やうり花
 名もゆめうりやうり花
 数嘆きて名をまひりうり花
 あつて招き合ひてかき花
 吹出風のためくくやうり花
 本氣もうりてゆり花
 妙うりり向うり花
 名も見たりと新しうり花
 志のあまを隔てくり花
 下新しうり花
 とくくうり花

半 醜
 如 昔
 東 甫
 東 口
 老 彦
 老 彦
 乙 次
 小 紅 外
 翠 園 外
 為 梁
 朴 源
 亞 物

吹き渡る風は小枝やうらを
黄くもつて海を染めてゆく

乙海
山

初霜や春わけて草葉のうら
つらとゆる草もさけの月
今更く零瀝小庭も秋さびて
かゝる空へさわらわて来れ
藪入の手もさう冷る目見え
つれづれも本もなりを以
苦とくなくありのこむ草鞋指
うらや京に陸軍ゆかり
おみよの押りよむすめをまは

兼文
金北

海石海石海石海石海

惟もや所く見やう摺子
志をうらむたき海の色にて
小堀の堀のさけと吹く
瘧瘧は種うらとく種をまれ
ゆかりをまきこのこもれ
三月のをまきうらを霧の海
いづの鱗をまきく早業
とく起てまきくいづの春
一まんをまきく海の色
水色のぬきみ井堀のさびて
やけとゆきめ海の色
さうなうら五十八巻の巻り坂

石海、石海石海石海石海石

馬鞍山の雪を一つとやく
 わすれてもをくわす麦の屑を
 よらよらおねねをくわす
 かまくと浮く息づく蛇とり
 燈籠のまろと釜をゆらす
 月のやわらかさ欠けし
 暮れ白ひくくらの極先
 暁て見えて給羽後のお世
 暮相ちりりと吸く口の
 けり切の跡をまきりの船より
 尾跡をくわすかとのむく白
 跡て居る濟の使は庭歩り

石海 石海 石海 石海 石海 石海 石海 石海

中へ舞いしれとやれし
 舞てみそ紅き紅き紅き
 池のそとよりゆきおれ
 月をを拂りしと炭依
 舞てみそ紅き紅き紅き
 雪掃く海を飲き瑞石
 波のそとよりゆきおれ
 冬けりのあつとや大板

完 此 魚 光 理 泰 知 素
 臨 本 珠 雪 井 賦 泰 阴

海 石 海

巨川 神名川の尾を横渡吉田町
橋一々尺寸はたはる秦野唐松

御ふかきと

先植ぬ播より毛冬の松、

更けや氷をこころ陸の考、

おのひ切て豆腐起す霜夜は 里

甲府を掃くさき多し

入おのりく度よなる志くれが

重けりや血のこゝ魚を控てり 任

船の板の才をそくそりつる考、

空橋やりよ力なき未刻なり、

終二集之概うたりる雪のおふ

三 北 海 秋

一 左 朗

貞 樹 葉 高 茂

置巨魁表居録より甲より

あゝ秋監罪より登て平並を悪く

又生ぬ冠を名とて

と川冬や風を眼のつて戸めいつ

浪をく越く時平名船布

飛やうよ空ゆる雲は子鳥く丸

塙部を丸

老翁も雪蹴る時のちりくが三

まよひする翁のそく音や神の留ち下サ

さうすけの姿居を考り小を老下ケ

むき一登りハ九軒より鴨の考

よめつねうかりる多中浮屠より 三十五

左

左

九 岳

杜 堂

新 外

習 金 石 像

藪々々々来て群々入る子々々
炭とりやきやき置とて
足力と立や味の時も空
険険をまてさうぬ白ひれ
落付くゆくものよす竹も
ちんまりと山の足えすく落葉
炭の香やお坐を君の譲り合
縁先より縁も通うて空・懸
たまさかふげく知字さきさき

江戸原まき

提灯を袖のそてかき志くれま
ぬれてまて袂もくれや初竹白
下ケ

等 我
宇 山
英 在
然 平
林 南
竹 水
金 舍
研 月
是 了
岸 外

引かきく天香も巻る大板のな
志くれま 時より人のまき
志くれま 和字お弁りぬらり
燈は見ゆる戸口の空も葉屋
木りくくやお松すましくく冠島
くつ空や他の小鴨のひも動き
初や和串 一枚の起くるあ
差蓋も引くせて病もきりれ
意志ぬれ海へまき 空の裏
取を納めまきまきまき 冬牡丹
然りのまきまきを結ぶまき
くくひまきまきまき 大板川

江 雨
喜 生
月 表
采 芹
吸 露
仙 丹
蕉 露
永 二
門 助
宗 是
初 女
名 山

補異

ちくくともきしや瀬の向く所
 三 杜 堂
 堀のけしきもきくす山の芋式
 結 如
 是ひくたより赤や雨の萩
 イセ 續 屋
 意園の茶園の持て冬 籠
 仙 丹
 さはくちや雲の雲とふし
 花の葉
 花は島の麓をさるや菅の軒
 五石港 青 豆
 志くくと見しとれや初 雲
 半 醒

戸さくくしや打しき風や吹さる

校合 東 甫

盪すれぬ勢の中なり冬の木

編者 乙 亮

對梅宇日涉茅六編事記 五編五月十五日終

五月十九日之物巻梅津元町なる蓬宇より文書。其の中、長井園
 日誌 四月廿四日毛伊勢崎生湖生か又東邊の春年在江杜水く二子
 在也 廿五日在年ある一巻の序に云くも杜水ある一巻に云く
 む 廿六日洋水園よりみかおく又本平水梨屋屋強羽海島、其の
 梨甚き所へ安杖杜水生風交をとりて見物 五月廿日羽洲の二歌仙
 ちくむ 二言源安川杜山術風く二子よりせうをとり物在中を
 危人牙仙満尾く一着杖く帰杖 曾對梅宇より四月廿二日附せり
 ちく同日日涉五編事記其書主人より物在中 吾在東京延平
 ちく一巻也なりし二歌仙をとりむ 二言源指の東延一泊 七日對

梅宇ハナ結徳ツク卷マキすのこめ初ハツメ次ツギ才サイくく日ヒ夜ヨしそくく物モノす
 後ノチ言コトくくく同ドウ付ツキ初ハツメ文モン多タく然シカドモ平ヘイ如ニガトシ葦アシ宇ウ老ロウ人ニン同ドウ付ツキくを命メイ
 良リョウ湖コ崎サキ一イツ見ミと文モン居イ中チュウい一句イツクも指サシいり早ハヤ速ソク出デ評ヒョウ出デ一イツク言コトいふ
 六月リクゴク之ノ初ハツメ菟ウ若ニガトシ草ソウ庵アン准シヨウ半ハル醒サメしとく之ノ吟ギンとくくむ本編を終る哉
西の歌ゆり
 与ヨ言コト水スイ斗ト大ダイ入ニル門カド後ノチ少シヨウ沼クマ津ツ驛エキ官カン所ショ出デ水スイ河カ岸キ結ツク尾ビ十二ジュニ百ヒャク西セイ京キョウ良リョウ大ダイ
 文モン多タ。花ハナ洛ラク三サン風フウ俳ハイ家カ文モン多タ便ベン覧ランしつと一枚イツパイ指サシを齋イハヒす。同ドウ付ツキく文モン海カイ九ク起キ。
 九ク岳トク。文モン多タ。其ソノかゝるの歌カガキ抄セウくくく多タの歌カガキくくく感カン者シャく
 縁ヰ七シチ日ニチ。廿ニヤウ五ゴ。甲カウ妙ミョウ少シヨウり帰キ存ゾンく朴ハク隱イン。月ツキの存ゾン依イ頼ライして執シツ筆ペツ
 す。与ヨ言コト。菟ウ若ニガトシ草ソウ庵アン君キミ帰キ國クニく如ニガトシを費ハイせり。品シヨウ川カウ遊ユウまて送ソウ程テイく文モン客キヤク
 去キ。南ナン海カイ。文モン雄ユウ。柳リュウ圃ボ。官カン尾ビと名ナ文モン社シャ叢ソウ并ヘイ今イマく。七月シチゲツ永エイ持チ向キョウ島シマ

三サン國クニ社シャ内ナイ結ツク尾ビ。八ハチ月ゲツ初ハツメ尾ビ妙ミョウく多タ田テン氏シ立タチす。二ニ條ジョウ家カ一イツク意イ殿テンく。
 宗ソウ通ツウ格カクは仰オウ付ツキ。洋ヨウ水スイ園エンの門カド居イ名ナ。此コノより一イツク亞ア物モノより文モン多タあり。中チュウ水スイ宗ソウ院エン叢ソウ
 全ゼンく。上ジョウ條ジョウの國クニ尾ビの演エン。祖ソ神カミく遺イ詠エイを建ケン研ケンす。全ゼン編ペン圖ト左サ右ウ



河カとある寸スン幅ハツ也ヤ

五イ戸コの演エン也ヤ

秋アキ若ニガトシ才サイ

吞海

補翼

等哉

助刺 可起守

未眠

乙彦

明治二年庚午五月

雲永宗曉建之
刻字者十八六

十日蓮花菴翠園入門。這媼也。故月院社五石の妻也。故夫の遺徳を
守りて貞実の可きあり。修め給ふ故に唐文書中。風俗峯山坊事詞
宗に涉扱る九月三日私書にお招はれ居りし程焉。

號金石賦

舉山更名金石
仍賦拙章一篇

蓮花菴金石後

一廣を造作と呼ぶを廣や大あるを重なり以六合四維備り
金鳥玉兔ル事仲と題し山海多未表宮人倫禽獸鱗蟲
皆を廣を潤れ其廣不極その、誰ぞ金石先生之先生其姓
詳ならずん終に二柱の法神は事よる國を造る事よるを
あれせし八百葉の神達に其先先生の祖神と云ふあり
さうに他邦の派ありては他邦の法律を有り度中を奉是
をさうに事あり其の法を奉是をさうに事あり其の法を奉是
よむ友の和らむ易ありは須磨の法に留視をさうに月のみ
衣れさうに更科山の香を志のひ雪の影に映りさうに松の葉の

向之の二語を以て世方の都より多難をくくの所為あり
作中ふ山あり金石と云四村の光景甚美ありふ巖
考を以て其終極を筆ふとふ此ふ七の雅の帰るべき
ことれざらんよほてんりそり名をいさくあるや扇快然と
しそを以ては然れんとある村天高く月を更み出
寒風和骨少破くとあはれ幾重とあり

四月二十一年庚午十月

身交生を密書

命終 東 裁松 二月十三日 陸前 江三 五月 二日 香以 九月 十五日

五編正誤 丁酉 縣合 丁酉 令誤 丁酉 遠ノ桃 丁酉 后換 丁酉

重編俳諧新聞誌 每編事之部目錄

初輯

○素堂自畫贊 ○卓郎退善法遠生席合 ○葱玉集 ○室江八島系
源成 ○大谷集 ○句問 ○就龍吟 ○豆人の存按 ○石市川
猿抱奇 以上九條己巳年夏發行

貳輯

○按山と山波日 ○一具庵任庵地 ○杉風自畫贊 廿一年歌考并盛雅坊の語
○金倉舎卜居地 ○系遊塚全形縮圖 ○甚煙集 ○不深退善集 ○豆や
とり集 ○就龍吟なき玉菊の句解 廿二年秋發行

參輯

○卓郎退善集 ○若菜生と高輝世 ○孤舟任庵地 ○葱玉集 以上九條
○佐藤祖神記 ○若菜祖神記 ○華見雅事判取性社別
○杉風の句と楠の句の公稿 ○九起現存俳家人名指集 ○鼻左辭
○裡庭自畫贊縮圖 ○天表漫日 ○垂物寄宿集 ○完位漫日 ○石手申
抄 ○涼風三弘仙 ○甚角志蹟縮圖 以上三十七條同年冬發行

對梅宇日涉

新聞誌第四編より題号日涉と云ひし程迄
 四卷全訂再考の仕に 求板 万屋庄助梓

凡撰集之法則あり許京字院法師曰てふを以て是合。送書者等撰ぶべし代。
 是例也。又曰書句とてやうと書有。地書句を介しと。或句置おある
 也。又曰とて集を。撰ぶるはたもやうとすべしと云ふなり。又集を才一
 と申す也。堂以書油は向心併もべし。又曰同。旭若の句。二三つなりと
 作事。思ふとてと才一也。又曰金報とて撰集する人の備ふありん。
 さやうと撰集を。才一性と等しとれ。率較もこれと社も柄たるとん
 云ふ也。是集者の設計とて。秒々堪ぬと云ふ。本集を札上の日記。
 その法則を言つと難し。と云ふなりと。新也。同心たきとありとれを
 具眼の人よと云ふなり。知らるるなりと云ふなり。

蘇原乙夫 萬葉房 為 撰 也

○對梅宇日涉補翼

三洲豊橋 小野杜堂
 武洲下橋 吉田皆如
 勢州甲冑 鈴木績雲

東京 下田仙月
 日 松井護外
 日 島本青宜
 日 湯川半醒

淺草沖藏前所

書林

万屋庄助梓

